

Dコース「佐竹発祥の地めぐり」

コース作成: まちかど案内人の会

サイクリング 約 12.2km

ウォーキング 約 10.4km

START 常陸太田市観光案内センター

- ① 佐竹寺
- ② 馬坂城跡
- ③ 稲村神社
- ④ 西山公園

GOAL 常陸太田市観光案内センター

※途中サイクリングとウォーキングでコース
が分かります

- 共通 
- サイクリング 
- ウォーキング 

-  Aコース
-  Bコース
-  Cコース
-  Dコース
-  おすすめ



① 佐竹寺（国指定重要文化財）妙福山妙音院佐竹寺 宗派：真言宗豊山派 御本尊：十一面観世音菩薩

創設は、寺記によると寛和元年（985）、花山天皇の命により元密上人の創建と伝えられ、一説には大同2年（807）、徳一上人の開創とも伝えられている。創建地は、現在地の北西2km、鶴ヶ池（跡）を隔てた字洞ヶ先の峰に建立、観音寺と称した。佐竹寺は、坂東三十三観音霊場22番札所で、安産、厄除けの観音様として信仰されている。札所巡りは、寛和年間（985～987）頃、花山天皇の御世に始まったと伝えられ、茨城県（常陸国）に6ヶ寺（第21番～26番）ある。

佐竹寺の変遷

天承元年（1131）源昌義は、京より下向し観音寺に入り、2年後の長承2年（1133）稲木村字馬坂に館を築き、姓を郷名をとり佐竹と改め、保延6年（1140）、寺領三百貫文を寄進し祈願寺とした。治承4年（1180）、佐竹4代秀義は金砂山合戦で源頼朝に敗れ、所領を没収され鎌倉御家人二階堂氏に与えられ、佐竹寺は天台宗寺院となる。文治5年（1189）、源頼朝奥州（藤原氏）征伐により佐竹4代秀義参戦、許されて旧領の一部を戻され、文永6年（1269）、佐竹6代長義は、荒れ果てた寺堂を再建し、現在の山号・院号・寺号に改めた。天文12年（1543）、兵火で焼失した為（御本尊様は無事）、3年後の天文15年（1546）、寺方の要望もあり佐竹18代義昭は現在地に移転再興した。慶長7年（1602）、佐竹氏が秋田へ国替之後、徳川3代將軍家光より朱印地8石を寺領として与えられる。佐竹寺本堂は、本屋は寄棟造り、屋根は茅葺、下層部は柿葺（こけらぶき）の裳階（もこし）を廻し中央は唐破風造、桁行き（間口）5間（奥行）5間（奥行）5間、観音堂としては全国第三位の大きさである。

佐竹寺の大改造

元禄年間（1690年代）、水戸藩2代藩主徳川光圀（水戸黄門）の社寺改革により、佐竹色を払拭しようと大改造をする。

1. 主屋に柿葺きの裳階を巡らし、回廊を取り除き、中央は唐破風造りとした。
2. 内陣は大きい梁を入れ、堂内の6本の柱を取り除き、窓・戸口を改造し、堂内の床を取り除き土間式にした。
3. 南向きの本堂を東向きとした。

佐竹寺の御詠歌、堂前・正面坂の地名、明治時代の遺跡調査書等あり

注）楼門、相模国（静岡県）の一信者が浄財を集め建立したと伝えられ、楼門、仁王様は宝永年間（1704～1711）に造られたと言われているが、作者不明とのこと。昭和15年火災により焼失したが（仁王様は無事）、まもなく建立した。

② 馬坂城（館）跡（市指定史跡）

馬坂城の築城は、今から878年前の平安時代末期、天承元年（1131）、新羅三郎源義光（八万太郎義家の弟）の孫源昌義が、京都より常陸国久慈郡佐竹郷（常陸太田市天神林町）に入部し、始めは鶴が池北東側の堂ヶ崎峰の観音寺（現佐竹寺）に入り、2年後の長承2年（1133）、稲木村馬坂（現天神林町間坂）の地に館を築いたのが始まりと伝えられ、以後昌義は郷名の佐竹を姓とした。城は、天神林町間坂の標高40m位の西南に突き出している台地の突端部にあり、南、西側は久慈川・山田川の洪積地帯で標高30m位にあり、北西、北側は鶴ヶ池があり、東側は土塁・空堀を巡らした要害堅古な連郭式平山城であり、城域は4ヘクタールに及ぶという。馬坂城（館）の城主は、佐竹初代昌義・2代忠義が居住し、3代隆義以後は太田城築城者藤原通延（天仁2年=1109築館）に圧力をかけ太田城に居住する。2代忠義以降の馬坂城（館）は、佐竹3代隆義の二子義清が入り村名の稲木を氏とし、9代230余年続いたが、応永14年（1407）の佐竹当主の関東管領上杉氏からの養子問題で反養子派となった稲木氏は、禅秀の乱（応永23年=1414）には反宗家方の為上杉禅秀（氏憲）方となり滅ぼされた。昌義は大変哀れみ、城の南猪手の地に手厚く葬り宝篋印塔を建立し供養した。時代は降って、15世紀初頭、佐竹13代当主の養子問題に端を発した出入の乱及び禅秀の乱により馬坂城は戦場となり、宝篋印塔は埋もれてしまった。江戸時代頃、野内長兵衛が畑を耕していたら、固いものにあたり掘り出したら無名の墓石にあったので、山の根（部落の東方）に移した。長兵衛の夢まくらに藤原通成の娘せき姫と名乗る女性が現れ、供養して下さいと懇願され、ばらばらの

宝篋印塔を現在地に組み立てて供養し、昭和39年2月に野内一族によって3.3㎡（1坪）の石垣が作られ、現在に至っている。

③ 稲村神社

御祭神

饒速日尊（にぎはやひのみこと）、国常立尊（くにのとこたちみこと）国狭槌尊、豊斟淳尊、泥土煮尊、沙土煮尊、大戸道尊、大苔辺尊、面足尊、惶根尊、伊弉諾尊、伊弉册尊

祭祀

例祭 5月1日。秋祭旧暦8月17日。冬至祭12月冬至の日

境内社 14社

八幡神社、素鷲神社、稲荷神社、富士神社、羽黒神社、秋葉神社、大杉神社、加波山神社、天満宮、雷神社、金比羅神社、春日神社、鷲森神社、御岩神社

由緒沿革

古墳時代中期（5世紀）には東国は、物部氏を中心とする大和政権の遠征軍によって征服され、稲村神社の祭神は久慈国造の物部連の祖伊香色雄命（いかがかしこのおのみこと）三世の孫、舟瀬足尼が任命された時、物部氏の先神である饒速日尊（にぎはやひのみこと）と、皇室の祖先神である国常立尊（くにのとこたちみこと）以下11神を祀っている。これらの神は、いずれも天神なので、神社は古くから天神社と呼ばれ、物部氏族二十五部の中に狭竹物部があり、移住によって佐竹郷の起源となり、後に久慈郡佐竹郷と呼ばれる行政区画となり、天神林は天神社と共に稲木と合わせて佐竹郷稲木村となった。続日本後記 嘉祥2年（849）4月7日の頃に「常陸国久慈郡稲木神、これを官社に預かる。水旱の時祈れば必ず感を致す縁也」とある。延喜5年（905）、醍醐天皇の命により、編纂された法令集の中の神名帳に「式内社」と呼ばれる神社が全国で3,132座あり、常陸国では28座、久慈郡では7座、常陸太田市では薩都神社・天志良神社・長幡部神社・稲村神社の4座ある。

稲村神社の名の由来

平安時代になると天神社は、村の名をとって稲木神社と呼ばれたらしいが、神社名は「稲村神社」と書かれた様であり、字数が似ているので稲村神社と書かれるようになり（新編常陸国誌）、中央政府（平安朝）にも伝えられた様である。

稲村神社の盛衰

嘉応2年（1170）、馬坂館に移住した佐竹（源）昌義は、鎌倉から八幡社を勧請すると稲村神社の信仰は衰え、館主が替わっても稲村神社への信仰は戻らなかった。慶長7年（1602）、佐竹氏が秋田国替え、徳川氏の支配下になっても天神林の鎮守は八幡社であり、稲村神社への信仰は戻らなかった。寛文3年（1663）、水戸2代藩主光圀公は領内の寺社を調査し、開基帳を作成し、寺社改革を開始し、八幡潰し断行して天神林の八幡社は潰され、稲村神社が天神林の鎮守となる。元禄4年（1694）、隠居した光圀公は、天神林の七つの塚に独化神（一柱の守）3代と偶生神（夫婦二柱の神）4代の鎮座している七代天神を、稲村神社に合祀した。明治時代になると廃仏毀釈となり稲村神社は、郷社に列し、明治18年神社を建て替え、敷地削平時石棺が出土し境内に保存されている。

④ 西山公園

花見の名所としても市内外に広く知られており、園内には1,500本ものサクラが植えられている。毎年4月には「さくらまつり」が開催されており、多くの見物客で賑わいを見せる。サクラのほかにも、ツツジやフジ、アジサイなど、四季折々の花が咲き誇る、一年を通して楽しめる憩いのスポット。また、同公園の一角は茨城県立自然公園に指定されており、周囲に整備された遊歩道を散策する際の拠点としても活用されている。